

正次郎船弁慶

長唄 全詞章

河竹默阿弥 作詞

三世杆屋正次郎 作曲

明治十八年（一八八五）十一月 新富座初演

新歌舞伎十

八番の内 題名『船弁慶』

（次郎） けふ思ひ立つ旅衣、けふ思ひ立つ旅衣、帰浴をいつと定めん。

（弁慶、名ノリ） かやうに候者は、西塔の傍に住ひする、武蔵坊弁慶にて候。

さても我が君判官殿は、頼朝の御代官として平家の一門滅したまひ、御兄弟の御中日月の如く御座あるべきを、言ひがひなき者の讒言に依り、遂に御仲違はれしこと、返すがへすも口惜しき次第なり。然れども我が君は、親兄の情を重んじたまひ、一先づ都をお聞きなされ、西国の方へ御下向ありて御身に誤りなきことを御歎きあるべき為、御乗船あらんとて、津の国尼ヶ崎大物の浦へと急ぎ候。

（唄） 頃は文治の初めつきた、鎌倉殿の疑ひも、晴れぬ時雨の両催ひ、袖さへ重く都をば傾く御運に落方、月もろともに西の空、身は雲水の定めなく潮も波も打寄する、大物の浦に着きにけり。

（義経） 御急ぎありし程に、是は早や津の国大物の浦へ御着なり。

（弁慶） 弁慶には路次を案じ、一足先きへ赴きしが、嘸待ち久しきことならん。

（義盛） 途中で暫し休息なし、只今これへ参つて候。

（有経） して弁慶殿には、此浦より、

我が君西国へ御下向の、

（景光） 御船はいづれへお頼みありしか、

御用意よろしく候や。

（弁慶） 其儀はお案じなさるゝな、某存ぜしものあれば、それへ御船を頼み申さん。

（義経） 日も晩景に及びたれば、弁慶早く計らひ候へ。

（弁慶） 心得申して候。

（唄） 所に古き船長の、軒端の松をしるべにて。

（弁慶） いかに、此家のうちへ案内申し候。

（船頭三保太） 案内とは、誰にて渡り候ぞ。

（弁慶） われらは武蔵にて候。

（船頭三保太） いや、武蔵殿の御下向にて候か。

（弁慶） さん候、我が君西国御下向につき、是まで御供申して候、御宿を申され候へ。

（船頭三保太） 畏つて候。

（弁慶） 御忍びの御旅行なれば、万端に心を付け、御乗船をも頼み申す。

（船頭三保太） 心得申して候、随分足早き船の候へば、御用次第に出し申さん。

（唄） いざ先づ是へと船長の、詞に人々席に着き、弁慶君に打ち向ひ。

（弁慶） いかに、我が君へ申し上げ候。

（義経） 何事にて候ぞ。

（弁慶） 此度西国御下向は、御忍びの旅行なり、静御供いたし候は、何とやらん似合しからず、世の人口も候へば、是より都へ御返しあつて然るべく存じ候。

（義経） 静を都へかへせとや。

（義盛） 是は武蔵殿の言はるゝ通り、

（有経） 御身に曇りあらざれど、

鎌倉殿の御疑念晴れず、

（景光） 今は日陰の御身なり。

（弁慶） 御謹みあつて静をば、疾く疾く都へ御返しあれ。

（義経） 我が左様存ぜしかど、慕ひ来るが不便さに心ならずも伴ふなり、今方々の意見につき、静を都へかへし申さん。弁慶よしな計らひ候へ。

（弁慶） 畏つて候、これより静が旅宿へ参り、此由申さうするにて候。いかに此家のうちに静の渡り候か、我が君よりの御使ひに、武蔵がこれへ参りて候。

（唄） 音なふ聲に寒菊の、替る姿も香は失せぬ、判官殿の愛妾、静は門へ立ち出で、

（静） あら、思ひ寄らずや武蔵殿、何のお使にて候ぞ。

（弁慶） さては餘の儀に候はず、我が君の御説には、これまで遙々参られしが、以前の恩を失はず、いと神妙なる事ながら、西国下向も忍びの旅中、長く波濤を伴はんこと、世の人口然るべからず、されば是より都へ、早々御帰られとの御事なり。

（静） これは思ひもよらぬ仰せかな、いづくまでも我が君の、御供とこそ思ひしに。

（弁慶） 頼みても猶頼みなき、人の心を如何にせん。

（静） 其仰せは尤なれど、御返事は何と申すべきぞ。

（弁慶） かやうにわらは御供申し、御返事は君の御大事になり候へば、如何にも留まり申すべし。

（静） あら事々しや、御大事ではあるまじく、唯御留まりが肝要にて候。

（唄） 斯くもつれなき計らひは、武蔵が業と思ふより。

（静） 此御返事はわらはより、直々君へ申し上げん。

（弁慶） それは兎も角いたされよ、さらば伴ひ申すべし。

（静） いざ疾く疾くと弁慶は、静を御前へ伴うて、

いかに申し上げ候、静の御参りにて候。

（義経） なに、静がこれへ参りしとや。

（弁慶） いざいざ、これへ進まれよ。

（義経） いかに静、われ兄の疑ひ受け、はるばる東へ下りしも、一度の対面あらずして、腰越よりして追ひ帰され。

（静） 畏つて候。

（唄） 今落人の身となりて、指す方もなく西国へ落行くわれを遙々と、これまで送り来りしは。

（義経） 返すがへすも神妙なり、いづくまでもと存ずれど、是より遠き波濤を越え、伴はんこと世上の聞え、落人の身に然るべからず、先づ此たびは都へかへり、此義経が世に出るまたの時節を待ち候へ。

（静） さてはわらはに此所より、都へ帰れと仰せありしは、君の御説で候しか、それと知らねば、問ふも憂し問はぬも辛し武蔵殿の、計らひなりと思ひしゆゑ、よしなき人を恨みしは、面なき事にて候ぞや。

（弁慶） いやいやそれは苦しからず、情なく帰れと仰せあるも、唯人口を憚るゆゑ、御心まで移り行く。

（唄） 秋となる思ひたまふぞと、あらきの真弓引きかへて、思むること哀れなり。

（静） 野邊に残りし穂芒の、露重げなる風情なり。

（弁慶） いや、兎に角に数ならぬ、身には恨みのなけれど。

（唄） これは船路の門出に、餘所に心は波風の、静を止めたまふかと、涙を流しゆふ幣の、かけて變らじと契りしことも定めなや、誠にこれは別れよりまざる憂き身の悲しさを、歎く心のやるせなき。名残を惜しむ愛情の、深きを君も察したまひ。暫しなりとも別れゆゑ、静に盃すゝめ候へ。

（義経） 暫しなりとも別れゆゑ、静に盃すゝめ候へ。

（四人） 畏つて候。

（唄） 従者は心得取りあはず、千代も替らぬ土器に、妹背はなれぬ一對の、瓶子を添へて捧ぐれば。

（弁慶） 実に美にこれは御門出の行末千代ぞと、菊の盃、静にこそはすゝめけり。

（静） わらはは君の御別れ、やる方なきにかき暮れて、涙に咽ぶばかりなり。

（弁慶） 御歎きは理なれど、旅の船路の門出の和歌、これにて一指し御舞ひ候へ。